

化

文

に入った。

1979年ごろだっただろうが、東京・神田の書店で道化師について書かれたロシア語の本を見つけた。ルドルフ・スラフスキイという研究者が書いたこの本は私を夢中にさせた。20世紀初頭のサーカス芸人や前衛芸術家の姿がいきいきと描かれていたからだ。

ロシアでは珍しかった芸を見た「カマキチ」、逆立ちする人を乗せた7人の棒を額に乗せはしごを登った「シマダ」、親子4人で足芸を見せた「イシヤマ」など、多くの伝説的な芸人がロシアのサーカス史に名前を残している。

その中に「タカシマ」で、ペトログラード(今のサンクトペテルブルク)の学生や労働者の間で圧倒的な人気があったという。もちろん写真でしか彼の芸を見ることができないが、当時の劇評にこんな記述があった。「銀の花柄のついた青いガウンを着たタカシマ

見せると、これはたしかに自分たちがやる曲芸だ」という。ロシアの文献を調べると、1911年にロシアに来たことまではわかった。しかし、タカシマらしき人物に旅券が発給された記録が見つからない。彼がいつ日本を出たのかは謎に包まれている。

マはそうした運動に意欲的だった「民衆喜劇座」という劇団に所属する芸人の一人だった。第1次世界大戦後、多くの芸人が帰国したが、タカシマはロシアに残った。ロシア人女性と結婚し、既に日本は遠い国になってしまっていたのだろうか。

かに埋葬された」。タカシマが亡くなったのは32年ごろのこと。日本を離れて数十年、異国で漂泊の暮らしを送った男の心はやはり故国にあったのかと思うと、胸が熱くなる。

私はタカシマからサーカス芸人の列伝をまとめたかと思っている。グローバル化が叫ばれる昨今だが、日本人はたくましさや失っていないだろうか。身一つで海を渡った芸人たちの生き方は、現代の私たちにも大事なことを教えてくれる。(おおしま・みきおノンフイクシヨウ作家)

# 海外驚かせた離れ業

◇100年前のロシアで活躍したサーカス芸人を追う◇

大島 幹 雄

幕末期に旅券が発給されるようになったとき、最初に交付されたのは芸人に対してだった。日本に来ていた外国人が太神楽や軽業曲芸などを見て、これを自分の国で見せたら商売になると考えたらしい。その誘いを受けて多くの芸人が海を渡ったが、欧米の観客を熱狂させたことはあまり知られていない。

感動した私はスラフスキイ氏に手紙を書き、モスクワに住む彼に会いに行った。そこで見せられたのが、ロシアで芸を見せたい日本人の写真だった。革命前のロシアで、多くの日本人の芸人が活躍していたことを知ったのはこのときだ。

という名前があった。いくつもの物を次々に空中に放り投げては受け止めるジャグリングの名手

は日本語で話しながら、目にもとまらぬ速さで小刀を操ってみせた。我々の知らない東洋のすばらしい演劇芸術を披露してくれた

私は日露を行き来しながら調査を進めた。タカシマが活躍したのはロシア革命直後の時代だ。当時は前衛芸術運動が盛り上がった時期で、サーカスが芸術の一環として注目を浴びていた。タカシ

マは「タカシマは『日本式に葬ってほしい』と遺言を残した。多くの仲間に見守られながら、美しい着物を着たタカシマは静かに埋葬された」。

明治以降に海外に渡航したのは知識人だと思われがちだが、決してそうではなかった。知識人は海外の知識を日本に持ち帰らなくてはならないという使命感を持って海を渡ったが、芸人たちは違う。「外国人がそんなに

俺の芸を見たいのなら見せてやろう」という、ふてぶてしい根性が彼らを海外に向かわせた。現地で結婚して住み着いてしまっただわりのなさも痛快ではないか。

現地の歴史に名残す彼らの足取りを追いかけることが私のライフワークだ。大学でロシア語を学んだ行きがかりで、卒業後、海外のサーカスを招へいする興行の世界



タカシマの芸は欧米の現代ジャグリングにも影響を与えている

前衛芸術として脚光を浴びたタカシマとはどんな人物だったのか。帰国後に、演技中のタカシマの写真を太神楽の親方に

私は日露を行き来しながら調査を進めた。タカシマが活躍したのはロシア革命直後の時代だ。当時は前衛芸術運動が盛り上がった時期で、サーカスが芸術の一環として注目を浴びていた。タカシ



「タカシマは『日本式に葬ってほしい』と遺言を残した。多くの仲間に見守られながら、美しい着物を着たタカシマは静かに埋葬された」。

明治以降に海外に渡航したのは知識人だと思われがちだが、決してそうではなかった。知識人は海外の知識を日本に持ち帰らなくてはならないという使命感を持って海を渡ったが、芸人たちは違う。「外国人がそんなに

俺の芸を見たいのなら見せてやろう」という、ふてぶてしい根性が彼らを海外に向かわせた。現地で結婚して住み着いてしまっただわりのなさも痛快ではないか。